

(00:00:00) **ゲスト：金子成人**

東海林: こんばんは。「カフェラテ」マスターの東海林桂です。

さらだ: ママのさらだたまこです。

東海林: 3月28日です。プロ野球開幕でございます…。

さらだ: ラジオ業界で仕事をしているとプロ野球が始まるのと始まらないのでは大きく変わるんですよ。

東海林: 簡単にいうと、半年ごとに仕事が多いのと…。

さらだ: プロ野球があるときは、少ないのと。

東海林: オフシーズンだけいっぱい仕事をやってる人もいるからね。

さらだ: なるほどね。

東海林: これからは毎晩スタジオに詰める仕事も減って、好きなだけドラマも見る事ができるんです。

さらだ: 東海林さん本来のドラマウォッチャーのお仕事もできるということですね。

東海林: 今夜のお客様は脚本家の金子成人さん。成人はナリトと読みます。

さらだ: 金子さんの作品にはたくさんおなじみが…。

東海林: 1972年『おはよう』で脚本家デビューと資料にありますから、脚本家歴が41年。1年に10本書いたとしても410本。実際にはもっと書かれてるから最低400本以上ですか。『太陽にほえろ!』や倉本聰さんでおなじみの『前略おふくろ様』。タッキー滝沢秀明さん主演の大河ドラマ『義経』も。

さらだ: そっか、『義経』も金子さんの作品なんですね。

東海林: 『鬼平犯科帳』にも参加。

さらだ: いろんなところにいっぱい書いてる人というイメージですね。

東海林: はい。2012年の映画『HOME 愛しの座敷わらし』は、私個人的に好きで見てたんですが、

さらだ: そうなんですか。いろんなお話を今日伺いたいと思います。

東海林: それでは参りましょう。

さらだ: 今夜も午前4時までごゆっくりお付き合いください。

＊

故郷は長崎県佐世保、生まれは成人の日

東海林: 早速お客様をご紹介いたしましょう。金子成人さんということで、セイジンさん。

さらだ: そうです。業界の人がお声掛けるときは、せいじん先生って。

東海林: そうなんです。どうもこんばんは。

金子:こんばんは。間違いじゃないです。

さらだ:セイジンさんと呼ばれても振り向いてくださる。

金子:成人の日、成人式生まれでしたから。

さらだ:そうなんですか。昔でいう1月15日。

東海林:つまり成人式の成人でと書いて、ナリトさん。

金子:昭和24年が、成人の日の制定された年なんです。その年の1月15日に生まれたんで。

さらだ:もうタイムリーというか、ニュース。それで佐世保のご出身。

金子:そうです。

さらだ:長崎県っていうのはやっぱり文学、音楽、芸術、いろんな人を…。

金子:後から考えるとそうなんだけど、僕は小さい頃は音楽です。ジャズをF E Nで聞いてました。米軍基地があったから、映画館もいっぱいあったんです。

さらだ:そっか。

東海林:ハンバーガー発祥の地です。

さらだ:佐世保のハンバーガーね。

(00:05:01)

金子:でもあの頃は食ってません。あるのは知ってましたが、僕はちょっとお金が…。

東海林:高いですよ。

金子:多分、高かったと思います。佐世保行ったことあります？

さらだ:佐世保はないかも。

東海林:僕1回だけ行ってます。20年ぐらい前。まだ特急さくらが走ってました。

金子:そうですね。そうか。

さらだ:私たちのイベントで、ハウステンボスまでは行ってるんですけど、あれ佐世保市？

金子:ですね。

さらだ:じゃあ行ってるんだ。ただ特殊なエリアですもんね、ハウステンボス。

金子:そうですね、入るともう外国なんだ。あの辺は、僕の高校のときの校区なんです。

さらだ:そうなんですか。

金子:あそこに僕の同級生なんか就職したりして。好きな場所ですけど。

さらだ:それじゃ開発される前からご存知なわけですよ。

金子:知ってます。近く行ったわけじゃないけど。

東海林:大村湾を走る大村線でしたっけ。景色が綺麗ですもんね。

金子:好きですね。列車の本数がもう少しいっぱいあったら、長崎空港着いたら

汽車で帰りたくなります。僕いつも長崎行くと、わざわざ長崎空港から大村の駅までバスで行って、こんなにないのかと思いながらも待ってます。好きですね、あそこの海。

さらだ:島もいっぱいあるし。だからやっぱりそういうところで、小さいときは映画を見たりジャズを聞いたり…。

金子:ジャズは、兄貴のお嫁さんの実家がレコード店だったんです。試聴盤ってのが店で取れるんです。

さらだ:放送局みたいですよ、試聴盤が手に入るって。

金子:それでクラシックだってなんだって聞いてたし、ラジオも流れてましたし。

東海林:78回転ですか？

金子:それもありましたね。でもそれはちょっと切り替わる時期でした。

さらだ:私も子どものときにプレイヤーっていうのがあって、レコード78の数字はあったんですよ。覚えが78、45、33だそうで、やっぱ古いね。

金子:安心して話せる（笑）。あの頃ですよ。

さらだ:そんな佐世保の生まれの金子成人さんです（笑）。

＊

ちょっと倉本聰先生の話

東海林:『前略おふくろ様』が金子さんの代表作品の1つなんですけども、僕は倉本さんの作品っていうイメージが強いんですけど。

金子:いや、あれ倉本さんの作品です。僕はそこで弟子でいましたから。

東海林:倉本聰さんの弟子。

金子:だもんで、ちょっと書けっていうんで書いた。

東海林:倉本聰さんが師匠ということは結構厳しそうですね。

金子:厳しいですね。

東海林:厳しかったですか。

金子:仕事についてはめちゃくちゃ厳しいです。他のときはもういろいろ吸収できたし、稽古場にも連れて行ってくれたし、初めて飛行機にも乗せてくれたし。

さらだ:初めて飛行機？

金子:北海道まで。

さらだ:まだその頃は東京にいらした頃ですよ？

金子:そうです。麻雀もいろいろ。遊びもいろいろ教えてくれたし。

さらだ:倉本先生とはどれぐらいお歳が離れてます？

金子:15です。

さらだ:ニッポン放送おやめになって、書き始めた時期？

金子:いや、もうやめてずいぶん経ってから。『文吾捕り物絵図』か何か、NHKの仕事が入っていたと思います。

東海林:ということは、富良野塾の大元みたいなことですかね。

金子:そうですね。

さらだ:コンセプトはあったという感じですか？

金子:富良野にそういう塾を作ろうっていう思いがあったときに、候補地を見に行ったことあるんです。原野の離農した農家の家がたくさんあって、ここに何か作るっていうことを…。

さらだ:やっぱラベンダーがこうあって…。

金子:そんなのは見えなかったね（笑）。

さらだ:原野、荒野？

(00:09:52)

金子:原野の廃屋が、生活をしてた残骸が残ってんです。子どもの習字など、そういうのが印象的でした。それから何年かして、富良野に住み始めたのかなと思います。

さらだ:倉本聰さんのところに行き着くまでにどんなことだったのかっていうのをまずお聞きしたいと思います。

＊

わが佐世保の青春を語る

金子:佐世保で育ったときは、ジャズを聞いたり、映画ですね。

東海林:映画多かったですか。

金子:多かったですね。とにかく東映が量産してた時代でしょ。東宝は社長シリーズとか見てました、日活も。

東海林:日活といえば、やっぱりマイトガイとか…。

金子:僕は、赤木圭一郎の方。彼が死んだっていうのがショックでね、後年、日活で仕事するときに赤木圭一郎さんが死んだっていうスタジオのセットを見に行きましたけど。

さらだ:ゴーカートの…。

金子:それで最初は、はずかしいんですけど役者になろうと思ったんです。

東海林・さらだ:意外な事実。

金子:それは小学校、中学校ぐらいまでじゃないかな。

さらだ:それは映画の影響ですか？ スクリーンに出たいなと…。

金子:違う。佐世保市内といっても、最初住んでたところは市内でもちょっと外れの方に住んでまして。まだ田園地帯が残って、田んぼなんかもあって、八幡神社

ってあって。夏になると、祭りの中でその土地の青年団が芝居をやったそうです。それとあの辺は炭鉱がありまして、大きな炭鉱じゃないんだけどあの頃活況でいろんな人が住んでたんで、旅回りの芝居が来るんですよ。

東海林:そういうのがあるんだ。

金子:浪曲ももちろん来ます。うちの住んでた田舎の公民館に、旅の一座が来てこれを見るのが好きだった。

さらだ:いわゆる、赤城の山も今宵限り～。

金子:いまでも憶えてるのは現代劇なんだよ。裁判劇みたいなもの。

東海林:裁判劇？

金子:いろんな一座が来ましたから、記憶も混じってますけど。その中で夕べ見た綺麗な女の人が、翌朝だったか昼間、公民館の窓際に、頬杖ついて外を見てるんです。それを見て、綺麗だなと。

さらだ:女優さんを。

金子:女優さん。ああいう仕事もいいよなと。

さらだ:きれいな女優さんとお仕事をする…。

金子:それとやっぱり刀抜きたいってのはあって、チャンバラです。

さらだ:脚本家になられてから、おやりになったこともあるんですか？

金子:芝居？ ないですよ。エキストラ出ました、ちょい役で。でもそれはやっぱりやらなくてよかったと思います。

東海林:なんでですか。

金子:笑うの、難しいんだよ。

東海林:笑うのが難しいんですか？

金子:笑顔を作るのがもう。それとロケ中心のドラマ書いたときに、港の漁師の役で出た。ヒロインに声をかけるだけの通りすがりの芝居なのに笑顔が引きつって、これはカットされてました（笑）。

さらだ:幻に…。

金子:幻。

さらだ:そういうときって、カットされずに出てたとしても出演者の中に名前って出るんですか？

金子:出ません。

さらだ:絶対出ないんですか。

金子:でも、俳優になろうと思っていた少年が高校受験が終わった日に、さあ、また映画見れるぞって観に行ったのが『伊豆の踊子』だったんです。

東海林:というと、どの役者さんの？

金子:吉永小百合さん、高橋英樹さんです。監督は西河克己さん。これを見てたら役者、動いてんだけど「これをこっち側で見てる人間がいるぞ」ってなぜか思

った。カメラがあって…。

(00:15:04)

さらだ:作ってる側のこと？

金子:作ってる側がいるぞって直感し、そっちの方がいいんじゃないかってなぜか思った。

さらだ:スクリーンを見ながら…。

金子:それで高校に入ると水泳部だったんだけど、シーズンオフには図書館行って映画シナリオの本とか、そればっかし見てました。

東海林:高校の頃からそういうのはあったんですね。

金子:ありました。シーズンオフになったら映画観に行ってたし…。

東海林:そうすると運動部に入っていながらも、シナリオ書こうという…。

金子:シナリオを書こうっていうよりも、監督になりたかったんだよね。

さらだ:当時の佐世保っていうのはいろんな文化は来てたけど、映画を作るのは東京とか京都とかそういうイメージ？

金子:もうそれは絶対そうだと。僕、勉強できませんでしたから、なんとか映画学科のあるところ行こうっていうのがあった。ところが家が、ちょっと商売が傾いてたんです。でも映画への道が捨てがたく、東京に行かなきゃって…。

さらだ:東京に行けばなんとかなる。

金子:なんとかなる。運動部でやってきたもんですから、そのついで東京のメーカーに就職できたんです。

＊

上京してからの生活

さらだ:一度は就職されて？

金子:ええ。

東海林:就職するから東京で出してくれればと。

金子:ダメだとは言わなかったんで、本人の意思は大事にしてくれて…。

さらだ:さあ東京来たぞと。それで一応仕事は真面目に…。

金子:やりました。卓球メーカーだったんですけど、営業をやってたんで車運転していろんなところに…。

さらだ:ラバーを売りに行ったり。

金子:そうです。工場に。

東海林:ラバー売りに行っただと。

金子:メーカーで作ってんのはラケットとか。会社は神田にあり、その年忘れもしないのは大晦日、僕は会社に宿直してました。

東海林:宿直があるんですか、卓球メーカーで？

金子:あるですよ。そしたら入った寮が火事になりました。大晦日ですよ。

さらだ:大晦日に火事。焼け出された？

金子:焼け出されて、服とか布団とかが焼けたの全然悔しくなかったんだけど、一応新作を書いていたんですよ、シナリオの。

さらだ:既に監督するときのために？

金子:ええ、何本か。これが焼けたのが悔しくて。

さらだ:それは覚えてらっしゃる、どういふのを書いてるか。焼けてなくなっちゃったんですか。

金子:高校のときに書いてた、井上靖の『あすなろ物語』を脚色したのがあったんです。他にも何本か書いてたんです。これが悔しい、悔しいっていうのはやっぱりその道を目指すべきだっていうのがあってシナリオやろうと、

さらだ:その火事がきっかけで…。

金子:映画監督になるべきだと。それでその頃見てた映画、**森谷司郎**(00:18:46)のと、●●(00:18:48)さんと成瀬巳喜男さん見て3人名前挙げました。住所調べて。

東海林:住所を調べて？

さらだ:そういうの載ってるんですか？

金子:いや、なんで聞いたのかな。あの頃はそんな…。

さらだ:インターネットもないし、マスコミ電話帳もないと思うんですよ。

金子:何で知ったかな。とにかく知ったんですよ。

さらだ:でも調べるってすごいですよね。

金子:最初に会いに行ったのは成瀬さんだった。弟子にしてくれって。

東海林:どこの馬の骨かわからないのが弟子にしてくれって来たら…。

さらだ:それも焼け出された卓球のメーカーの人でしょ。

金子:庭に成瀬さん来たけど、いきなり弟子にしてくれって怪しいと思ったんだろうね。「いまは徒弟制度がないから監督やりたかったら脚本の勉強をなさい」って言われたんです。

東海林:それで脚本の勉強を…。

金子:シナリオ研究所っていうところに。

さらだ:新藤兼人さんがやってるとこ？

金子:あの頃は新藤さんかな。いろんな馬場当さんとか、石堂淑朗さんもいましたし。新井一さんの教室ですよ。

(00:20:05)

さらだ:新井一さんのシナリオセンターの方の系列の…。

金子:その前身です。青山の民芸があったすぐそばでやってたでんすけど。

東海林:それは卓球メーカーのサラリーマンしながら、シナリオ研究所に？

金子:行っていました。でも2つ両方ちょっとやれないなと思って、翌年卓球メーカー辞めてアルバイト生活を。

さらだ:アルバイトってどんなことされたんですか？

東海林:まだでも20歳かそこらで…。

金子:そうです。最初何やったっけな。映画館にあるスピード写真の現像プリントをやってるちっちゃな会社に入ったんですけど、そこは1日でいやになって辞めて。それで喫茶店。それからコーヒーの卸しっていうか、生のコーヒーを焙煎していろんな喫茶店に配達する人を3年ぐらいやってたのかな。その時にはもう倉本さんと出会ってたんだな、シナリオ研究所に行ってたから。

さらだ:シナリオ研究に倉本聰さんも教えに？

金子:たまたまその1年だけ来て、ゼミを持ったんです。そこで僕は、本当は倉本さん目指したわけじゃなくて、成瀬さんの映画『乱れ雲』の脚本を書いた山田信夫さんのゼミに入ろうと思って申し込んだら、定員オーバーで別のところにやらされたっていうか。この人が残ってるっていう、それが倉本さんだった。

さらだ:そうなんですか。

金子:今考えると、ご縁なんですね。

＊

倉本師匠の台本を清書する日々

東海林:で、倉本さんに弟子入りみたいな形に。最初は先生と生徒ですよ。

金子:そうです。そのゼミが終わってから、たまたまその同じゼミに僕の高校の1年先輩がいて、その人がまず倉本さんの内弟子になっちゃった。

さらだ:佐世保の出身の方？

金子:そうです。同じゼミ生でもあるので行きやすくて、腹減ったなと思ったらそこを訪ねて飯食わしてもらって…。

さらだ:なんとなくウロウロとね。

金子:それでその先輩が辞めたんですよ、国へ帰るってということで。家の跡を継がなきゃいけなくなった。

東海林:家業ね。

金子:そしたらちょっと運転手やれとか、清書してくれとか。でも俺、内弟子っていうの嫌だから、倉本さんの家の近くに部屋を借りてそこから通うことにした。でも毎日じゃないです、僕も仕事。食わなきゃいけないんだよ。

さらだ:アルバイト。

金子:喫茶店でアルバイトしながら、仕事終わったら清書しに行くとか。

東海林:倉本聰さんのドラマを清書すると、勉強になるわけですね。

金子:それは勉強になったと思います。

東海林:倉本聰さんは字が汚かったんですか。

金子:いや、そのころ横書きでやっててきれいに書く。

東海林:横書き？

金子:セリフには喋る役名の名前が書いてないんです。もちろん最初の方は書いてあるんだけど。

さらだ:あとは推測していかなきゃいけない。

金子:それをわかって書かないと大変なことになる。また、何でこんなここで沈黙があったり、「はい」とか「うん」とかっていうのは何であるのかっていうのは、疑問も持ってここで止まったらいけないんだけど、とにかく書くんですけど。それを翌週とか2, 3週後にテレビ局でリハーサル。あの頃は毎週ちゃんとやってましたから。そうすると、台本ができたときに倉本さんが、役者さんたちに駄目出しっていうか、これはこういう意味だよっていうことを…。

東海林:倉本さんはその当時からそういうところ厳しかったんですね。

金子:そうすると書いた僕も、そういうことかってわかってくる。オンエアのとき、こっちが時間あるときは、倉本さんの家に行って一緒にその出来上がった作品を見るでしょ。そうすると、あの清書した本がこんな形なるのかっていうのは、それはもう何本もやってくうちにわかったんでしょうね。

(00:25:14)

東海林:その清書した本ってのは何だったんですか。

金子:いろいろありますよ。NHKの『赤ひげ』でしょ。それから『君は海を見たか』とか、あの頃の火サス連続のやつはいくつか。『勝海舟』もやりました。

さらだ:いきなり大河ドラマ『勝海舟』。

金子:全部じゃないんですけど。途中で急いでやるんで、もう疲れ果てたときの横書きで書いたやつを僕が縦書きに直して。TBSだったか田宮二郎さんの『白い影』なんか清書してたような気がする。日テレの『2丁目3番地』とか。

東海林:でも仕事をやりながらっていうのも大変ですね。

金子:清書ですから、出来上がってるやつだから。スナックなんかで働いて、夜中倉本さんの家に寄って清書して。1時間で15枚ぐらいは。結構速いんです。

東海林:縦書きにするわけですね。

さらだ:シナリオの書き方だからセリフとト書きと。

金子:そうです。

東海林:金子さんの字はきれい？

金子:きれいでした。とにかくわかりやすく。

さらだ:お清書は何年ぐらい続けられたんですか。

金子: 4, 5年かな。

さらだ: その時はまだ映画監督に行くというつもりで…。

金子: いや、その頃は書くのが面白くなってきたんだよ。

さらだ: そうなんだ。脚本家っていう仕事があるんだという認識をしはじめ、別に映画じゃなくてもテレビでもいいやと、実践すると面白いなと。

金子: と思い始めて、俺もやっぱこの道かと。人前で喋るのが得意な方じゃなかったんで、書くといろんな思いをかけるなっていうのは。

東海林: なるほど。

さらだ: なるほど。昔はちょっと芝居いいなと思って映画監督かな、作る方だなと思ったけど、一番いいのは書くことだと。映画じゃなくても、テレビドラマで、とにかく書くと。

金子: そう思い始めました。

さらだ: それは倉本先生にもある時、言ったんですか？

金子: いや、そんな宣言はしてないんです。とにかくシナリオ、脚本ってやつを身につけなきゃっていう思いで来てますから。

さらだ: シナリオ勉強する人だという認識だから、もう先生は、

金子: そうです。その頃から落語とか歌舞伎座の舞台も好きだと思うんですけどね。だからそういうのをやりながら清書なんかしてたんですけど、ただ映画じゃなきゃとか、テレビじゃなきゃとかっていう区別が全くなくて書くことが面白いんだっていうこと思いました。

＊

デビュー作でつまづく

さらだ: 例えば倉本先生が、ちょっと時間あったら好きなの書いて見せなさい、とかそういうのは？

金子: 好きなのというよりもデビュー作となったのが、倉本さんがメインライターだった連続もの1本なんです。そういうやり方なんです。

さらだ: それがTBSの『おはよう』って。

東海林: 『おはよう』はやっぱ倉本さんの作品…。

金子: そう。そこで1本書けって。

さらだ: それは倉本先生の横書きがないわけですよ。でも何話目かだから、書けるだろうという…。

金子: そうです。

さらだ: 実際におやりになってどうでした？

金子: いけません。もうスナックでバイトし、終わってから立ち寄って、最初に

大箱というか簡単な全体像を示すんですが、何度もダメ出しが入って…。

東海林:倉本さんって大箱、中箱、小箱って書くんだっていうふうに資料に書いてありましたけど。

(00:30:07)

金子:大箱が大体ペラ 1 枚、原稿用紙 1 枚。全体の流れの箇条書きみたいなんですけど。

東海林:それが大箱。

金子:ええ。大箱の A C T 4 まで書いていくと、ここでまず見るんです。するとダメ出しがきて…。

さらだ:起承転結になってるかどうか…。

金子:ドラマが展開してるかどうかのチェック。それを何回かやって、箱を変えて、そこで直しが出て台本を作るんです。変えたんだけどダメ出しが来て、テレビ局からもダメ出しが来ると直しをする。でも 1 人じゃうまくいかないから、スナックで働いたあと倉本さんの部屋で直しをしてたんですけど、僕知らないうちに寝てたんです。それで起こされて、今日はいいから帰れって、なんていうこともありました。

結局倉本さんがちょっと直して僕の名前で放送したんですけど、出来上がりがスポーツ新聞のテレビ批評欄で酷評されました。

さらだ:それが 1 9 7 2 年のデビュー作『おはよう』。

金子:「倉本聰が創った世界を見事に壊した」って評。僕はいまだにその切り抜き持ってるんですけど。

さらだ:脚本が金子成人さんの名前になってるから、ずっと倉本でいいと思って見てたのにあれ？ みたいな。

金子:壊したっていうのは、やっぱドラマが違うってことなんです。あの番組は、向田さんも書いてるんですよ。

東海林:僕も資料で見たら、あの作品の脚本は倉本さん、向田さん、金子さんと 3 人の名前になっています。

金子:それで僕は酷評されて、倉本さんに「ドラマを勉強し直せ、構成を勉強し直せ」って 2 時間ぐらい説教されました。

さらだ:このときの演出が久世光彦さん？

金子:いや、その回は違います。久世さんもその番組演出だったんです。何人かいました。鴨下さんとか。

東海林:主演は若尾文子さんと、大橋巨泉さん。

金子:大橋巨泉さん。家を出てる亭主の役なんで、そんなベタっとは出ないですよ。

さらだ:巨泉さんは最初「私は即興の人間だからドラマなんかやれませんよ」っ

で断ったけど、そこがいいんだって。あなたの演出部分は口つけとくからって言われて引き受けたと、何かで読みました。

金子:でも、そのときの批評をしてくれた人は、シライジュンイチさんですけど、わかってるなと思って。その後、僕も何本か書いたんですけど、シライさんにも会ったことあるけど、僕のあの批評したことをシライさんも覚えてないです。でも他の番組何本か書いたときに褒めてくれて、その後ずっと褒めてくれたんです。だから恩人といえど恩人なんです。

さらだ:やっぱりテレビ批評家って、脚本家とか演出家を育てることもあるんですね？

金子:あると思います。ああいう人がいましたらね。

東海林:やっぱり一番痛いところを突かれたわけですね。

金子:倉本さんに言われたこと同じことなんですけどね。ドラマの構成とかドラマとは何かっていうのを。

さらだ:もう1回大箱に立ち戻るっていうか…。

金子:大箱というよりも、もっと構成の勉強しろってことなんです。その後は、もう仕事は来ないと思っていたのでとにかく構成の勉強しようと。トウテイ(00:34:30) 4幕もの。だからエピセン(00:34:31)とか。あと橋本忍さんの作品とか黒澤さんのね。

さらだ:やっぱりそうやって勉強していくからどんどんそういうところに行っちゃうんですね。本格的なお勉強に。

金子:自分以外、みんな師匠だと思っちゃうから素直に聞いてたんです。

東海林:勉強するっていうけどどういうものを見たらいいかとか、どういう勉強したらいいかとか悩みませんでした？

金子:いや、構成きちっとしたのは黒澤さんの、橋本さんの作品とかって倉本さんは言ってくれました。

(00:35:01)

さらだ:そうするとエンゲキノリクセン(00:35:03)だとか。

金子:あれは4幕ものだから、起承転結だから。こっちはクラシックも4楽章あるとか。そういうのもいいのよ、聞きながらとか。

さらだ:だんだん身についてくるですね、ある意味。

金子:ところが半分破門みたいな形でしょ。遊びは行ってましたけど、仕事ないわけですから。

さらだ:けっこう厳しいですね。

金子:厳しいです。でも冷たいわけじゃなくて、放送局から仕事は来るとは来ないわけだから。倉本さんも「あいつ1回ミスってるからな」って。だから1年ぐらい何も書かずに、そういう芝居を見たり、作家の台本を書き写したりで…。

東海林:その頃は倉本さんの清書はもう？

金子:やってみました。

＊

コンクールに応募して復活

さらだ:師匠のお清書をやりつつ、もう1回復活を考える日々だったと…。

金子:自分では勉強になってるかどうかっていうのはわかんないわけです。そうすると無性に書きたくなって、コンクールに応募し始めたんです。そしたら、最初に『太陽にほえろ！』もそうです、コンクールに応募して。

東海林:コンクール作品ですか？

金子:そうです。

さらだ:『太陽にほえろ！』にコンクール募集があったんですか？

金子:ドラマ雑誌に、その番組のプロットなりストーリーなり、台本募集ってあったんです。

さらだ:月刊ドラマみたいな？

金子:あるいはシナリオだったかな？ たまたまいいネタがあったもんですから、応募したら台本を書くことになったんですね。

さらだ:きちっとした構成もできてたんだ。

金子:それは、ストーリーでしたが。

さらだ:ストーリーだけど、でもちゃんとそれが身に付いてたんですね。

金子:わかんないよね。

さらだ:でもそこで1等賞獲るっていうのはやっぱり、できてる。

金子:その後、松竹でもちょっと賞獲ったんですけど、これは作品にはなりませんでした。それと日活ロマンポルノも応募してる。それで賞を獲った。

さらだ:倉本先生は見てて、なんか…。

金子:台本になってから倉本先生に見せたんです。ロマンポルノのやつ。そしたらニヤッと笑って、「書けるじゃねえか」って言われたんです。

東海林:意味深いよね。

さらだ:もう書けてるな、と。

金子:それで、一緒に『大都会』とか。

さらだ:さらっと言っちゃいましたけど、その『太陽にほえろ！』をプロットが一等賞になって、台本書かせてっていうことは、『太陽にほえろ！』で、倉本さんところからは独立して…。

金子:いや、違う。

東海林:ともかくも『太陽にほえろ！』も書いたわけですか？

金子:書いたんです。それは倉本さんと全く関係ない。

さらだ:すんなり行きました？

金子:行きました。

さらだ:勉強の成果があったんだ。

金子:でしょうねって言うしかない。あそこのメインライターは小川英さんですけど、小川さんの手が入ることもなく行きました。

東海林:そうすると、『太陽にほえろ！』から仕事が来るように…。

金子:いや1本きり。コンクールの結果として僕の作品を採用したという、商品価値しかないわけです。

さらだ:小川英さんから、「うちの仲間に入ってね」みたいなのも？

金子:なかったです。おそらく倉本さんどこに在って知ってたからかな。当時、日活ロマンポルノ書いてて、やがて倉本さんが『前略—』か『大都会』のどっちだったか…。

さらだ:どちらかで、今度やっぱりやってみて書けるじゃないか、と認められ…。

金子:何本か『前略—』を書くようになって。もちろん清書もしてますけど、アルバイト、こっちはそこまででした。

＊

八千草薫さんの運転手になる

さらだ:それは、まだまだスナックのアルバイトで…。

金子:いやそのときは、八千草さんの運転手。

東海林:八千草薫さんの運転手っていう仕事もあった…。

さらだ:いわゆるプロダクションの現場マネージャーみたいな？

金子:違います。おうちの運転手です。

さらだ:おうちの？八千草さんが個人的に雇っている。

金子:谷口家のね。

(00:40:00)

さらだ:谷口千吉さんちだから。谷口さんも乗せたんですか？

金子:谷口さんもちろん、亡くなったお母さんも。

さらだ:お母さまが買い物に行くわよっていったら。

金子:そうです。

さらだ:ちょっと病院行くからって言ったら…。

金子:そうです。それも倉本さんの紹介で。

さらだ:住み込みなんですか？

金子:いえ、通いです。

さらだ:必ず朝何時に行くとかあるんですか？

金子:決まってません。撮影ロケが早いときはもちろん早くから行くし、遅くていいときはいいんですよ。

さらだ:お休みの日もあるんですか？ 今日は車は出ないみたいナ。

金子:ありました。また、例えば撮影所に八千草さん送って行って、八千草家の方で用事がないときは全部そこにいていいんですよ。撮影所の食堂で、書いていられた。

さらだ:シナリオ書いてきてた。

東海林:なんかすごく、映画の仕事してるぞみたいな雰囲気にもなりますよね、そうすると。撮影所の食堂ですもんね。

金子:ですから、いつかはって…。

さらだ:でも周りの環境はすごく良くなってますよね、刺激があって。

金子:ええ、そうです。

さらだ:それおいくつぐらいのときです？

金子:25です。3年ぐらいやってみましたから。

さらだ:3年って長いですよ。

金子:でも、それでちゃんと生活できてましたね。

東海林:ただ、シナリオによる収入ではないですね。

金子:ないです。でもその頃、『前略一』も書き始めたのかな、何本か書いたんですけど、その時やっぱりいいギャラをもらえるんだって。ただ倉本さんに言われたのは、いまの収入の3倍原稿で稼げたら一本立ちしろって。

さらだ:谷口家の八千草薫さんの運転手をやりながら、シナリオも？

金子:やってみました。『大都会』もそうだな。それやりながら書いた。

さらだ:でも、八千草さんはそういうのを理解しつつ…。

金子:もちろん。

さらだ:「シナリオ頑張ってる？」とか言いながら…。

金子:それは言いませんけど。自分が出た作品とか撮影現場、舞台とか行ったときは「どうだった？」って聞いてくる。

東海林:若いとき綺麗だったですよ。

金子:僕ファンでしたから。

さらだ:そうなんですね。ドキドキしながら。

金子:最初ですよ。

さらだ:いわゆる大女優さんで、映画監督さんと住んでる大女優さんというのは、本当に典型的なスターの家じゃないですか。

金子:そういう思いは全くなかったです。谷口さんと2人で、谷口さんを送っていったりするときは、黒澤さんとの思い出とか、三船さんとの採用試験のときの

話とか、昔の話をいっぱいしてくれました。だから、さっきの『太陽にほえろ！』に応募したときの、これタイトルは「跳弾」といって、跳ねる弾って書くんだよ。そのヒントくれたの谷口さんなんです。戦争中、川なんかに銃弾を撃つと跳ねることあるんだよ。

東海林:水切りみたいになるやつですね。

金子:そう。そういうことあるんだよっていうのを聞いてたんで、それをいただいて、刑事が威嚇射撃をかなりするんだけど、それがたまたま通行中の一般人にバーンと当たってしまうと。それで刑事が自信をちょっとなくしてしまうっていうドラマを書いたんです。

さらだ:それで、その刑事が何かのきっかけで自信を回復する。

金子:っていう、それは何だったかちょっと今おぼろなんですけど。

東海林:『太陽にほえろ！』ですよ。そうすると、誰刑事？

金子:勝野君です。

東海林:テキサス。

さらだ:テキサスさんが自信を失った？

金子:そうです。本当の犯人を追い詰めたときに引けなくなってしまうっていう話でした。それは覚えてるんだよ、いまでも。

東海林:やっぱり金子さんの最初の入賞作っていうのは…。

さらだ:でもヒントをもらったとか、ちょっと人の人情がらみの金子ワールドがもう最初っから出てたという感じで、

(00:44:51)

金子:ありました。ちょっと細かい話忘れたんですけど、僕の好きだった東宝の俳優さんで、堺左千夫さんっていう人が、誰かの親父役で出てたんだよ。そういうのも嬉しかったんだよ。

東海林:ここで1曲。金子さんの何か思い出に残る歌とか、思い出に残る曲がありましたら伺いたいんですけども。

金子:20歳ちょっと過ぎぐらいだったのかな、映画よく見てた頃に見た『おもいでで夏』、向こうの題名で言うと『Summer of 42』、1942の夏っていうタイトル。少年たち3人の話なんだよね。これがなぜか好きでね、ポスターまで剥がしてきて。

東海林:『おもいでで夏』？ 映画のサントラですね。

金子:うん。

さらだ:それでは聞いていただきましょう。『おもいでで夏』。

東海林:ミシェル・ルクランです。

東海林:『おもいで夏』、聞いていただきました。

＊

向田賞までの歩み

東海林:3倍ぐらい稼ぐと脚本で食えるようになるっていうふうになるには、どんなきっかけがあったんです？

金子:鎌田敏夫さんが入ってる、日本テレビの『俺たちの祭』。あれを月に1本とか書けるようになったんです。それもあって、一方でアルバイトを辞めるようになりました。

さらだ:八千草さんから離れて。一本立ちできるようになったかなって。

東海林:月に1本？

金子:月に1本ぐらいですね。

東海林:それでも月に1本っていうのは大変ですよ。

金子:それだけじゃなかったかな。仕事がいくつかに重なったんで、時間も必要だし、

東海林:書く時間がっていうところが必要になると、

金子:ええ。それで『大都会』なんかも返したな。あとはパート1パート2か、あの頃ちょっと錯綜してるんではっきりしないんですけど。

東海林:『大都会』とかっていうとね、やっぱりドンパチの。

さらだ:戦車で出てくるのが多いですもんね。

金子:あれはいつ頃だったのかな。たまたま倉本さんも『大都会』のパート1を書いて、山本さんがメインでドンパチだから、あんまりないんですよ、パート1は。

東海林:パート1はあんまりないんですね。

金子:ないです。だから僕1本。これも八千草さんの運転しながら書いたんですけど。それを、それをたまたま向田さんが見ててくれて、向田さんと倉本さんと仲良しだったら、あんたんとこの若い衆を貸してって…。

さらだ:貸して？

金子:貸してってというのは要するに紹介したいと。そういう向田さんの口利きで、民放で初めて1人で仕事をする事ができたわけです。

東海林:それは何のドラマ？

金子:松本清張の『渡された場面』。

東海林:サスペンス？

金子:サスペンスです。その当時、テレビ朝日は何だったかな。

東海林・さらだ:NET！

金子:その頃ですよ。そこで1人でその作品を4本、1時間の4本。そういうことがあったんで独立してるんです。

さらだ:それは向田さんが何か相談されるのかしら。

金子:多分、そうだと思う。

さらだ:向田さん忙しいし。

金子:そのプロダクションの人と親しかったんで、偶然『大都会』見たら…。

さらだ:いいのがあるなと思ってたら、そういう話が来たからちょっと聞いてみようかしらって…。

東海林:向田邦子さんってどんな人だったんだろう、どんな方でした？

(00:50:04)

金子:最初は、もう本当に性格のいいお姉ちゃんだった。

東海林:性格のいいお姉ちゃん。

金子:ところが仕事しはじめるでしょ、パーティーなんかで会々と、パッと顔見るんです。で「目、輝いてるから大丈夫」だっていう…。

東海林:へえ。

金子:怖い。だから怖い目を見てる人、だからあの人の前で変なことはできないぞっていう…。

東海林:目が輝いてないっていうことがあったら…。

さらだ:その裏にすごい深い意味があるかもしれないですね。

金子:わかりませんが。あの場ではよしよしとかって。

東海林:目輝いてるっていうのは、向田さんの褒め言葉なんですね、

金子:っていうか、“仕事意欲あるな”っていう言い方だと思うんですけど。

さらだ:要するに前向きに、のっていつてる、どんどのっていつてるっていう。

金子:というつもり、意味だったような気がしますけど。

東海林:逆に、倉本さんはそういうふうにおっしゃったことあります？

金子:いや、作品についてはそんな言わないんです。もう独立してからは。でも、怖いです。

東海林:何言われるかわからない。何も言わないけど怖い？

金子:怖いです。もう師匠ですから。とにかく今でも怖いです。緊張します。

さらだ:好々爺な感じじゃないんですか？

金子:まだ怖いな。

さらだ:やっぱりいつまでたってもその距離感っていうのは同じなんですか。

金子:同じですね。

さらだ:でもすごく、何かご縁というのがやっぱり世の中あるなと思ったら、その金子成人さんが、向田邦子賞をお取りになるじゃないですか。そのときの主演してたのは八千草さん。

金子:そうです。

さらだ:『魚心あれば嫁心』。演出は深町幸男さん。

金子:このときは、もう1本、新春ドラマスペシャル。

さらだ:『終わりのない童話』。これも向田邦子新春ドラマで、久世さん。

金子:そうです。

さらだ:この2本が受賞作品。

金子:はい。

さらだ:なんかすごく巡り合わせというか…。

東海林:繋がり。

金子:それでいて向田さんとは、生前はそんなに何回かし…。

さらだ:その目が輝いてるとかね。いい人いるから紹介するとか。

金子:それぐらいしかないんだけど。僕が北海道で仕事してるときに事故で、あつという間に死んでしまったっていうのがニュースが飛び込んできたんです。

＊

八千草薫との縁も大きい

東海林:八千草さんのお仕事も聞かなくちゃ。

さらだ:八千草さんは、その前にも書いてます？

金子:書いてます。八千草さんの仕事って意外と多いです。連続物とか。

さらだ:それは、最初のとときとか結構ドキドキしたりとか。

金子:します。しますが、作品には自信があったんで。だから嫌がりはしないだろうと。

さらだ:でも、例えば八千草さんのところに行って、台本見て初めて、金子成人って書いてあるってそういう驚きは…。

金子:ないと思います。多分企画の段階から、脚本金子ですっていうのは伝わってると思いますから。

さらだ:初めてはどういう作品だったんですか。

金子:なんだったかな、C B Cの東芝日曜劇場だ。思い出しました。八千草さんと風間くんと。

さらだ:風間杜夫さん？

金子:そう。

さらだ:本打ちとかは、どんな感じなんですか？

金子:会ったら、ニコニコして。

さらだ:やっと仕事できたねみたいな…。

金子:できたねみたいな。多分。

さらだ:そういう優しく演技をしてくださって。

金子:多分。もし脚本に問題があれば、やっぱりプロですから厳しく言うんですけど、それはなかったです。嬉しかったのは、名古屋でその後いろいろ…。

さらだ:割と頻繁に。

金子:頻繁にやりましたね。

さらだ:でも、そこでいろんな方と共演の本お書きになるけど、八千草さんが主演した作品で向田邦子賞っていうのは、なんか…。

金子:本当に、巡り合わせだね。

さらだ:その時やっぱり格別喜んでくれます？

東海林:今でも八千草さんとお付き合いは？

金子:そんなにないんですけど、谷口さんが亡くなったときとか、たまに。

(00:55:07)

さらだ:いまでも画面出てらっしゃると綺麗で。

金子:やっぱ気になって見ますよ。

さらだ:品が良くて、これぞ日本の女優さんという感じです。

東海林:欠かせないですよ。

＊

久世光彦との仕事は多彩だった

さらだ:向田賞のもう1つ、久世さんとの付き合いってどういうところから始まったんですか？

金子:元々久世さんと倉本さんって同級生でしょ。

さらだ:東京大学のね。

金子:倉本さんのシナリオ研究所のゼミにいるときに、倉本さんもヤクザ映画が好きで、そのとき久世さんもヤクザ映画がお好きで、健さんの。

さらだ:高倉健。

金子:うん。映画をゼミの中で上映して、そこに講師として久世さんが来てたりしてたんですよ。

さらだ:そうなんですか。

金子:その後は全く、久世さんとは僕は音沙汰がなくて。倉本さんも久世さんとあまり仕事は…。

さらだ:そうですね。

金子:若山富三郎さんの連続ものを書いてたとき、当時の若山さんのマネージャーだった人が、カノックスに入社したんです。

さらだ:太田さんですね。

金子:太田さんが、若山さん主演で書いたホームドラマを気に入ってくれて、久世さんと仕事させようとしたんです。たまたまその時、TBSで番組が早く打ち切ったのがあって、急遽3本ドラマを作ることになり、その中の1本の依頼が来て引き受けた。そのときの演出が久世さんだった。

さらだ:それはまだ「向田邦子新春ドラマ」とは関係なかった？

金子:関係なかった。単発で最初、桃井かおりさんと竹下景子さんと小林薫。これでコメディを作ったんです。馬鹿な女2人の、馬鹿な詐欺師。それがなぜか評判良くて、それから2時間ドラマにバージョンアップして、何本か撮ったんです。

さらだ:それはなんていうタイトルで？

金子:『危険なふたり』。

さらだ:私あの頃、久世さんの会社が『料理万歳』で番組を作って、よく私はそれを抜いて書いてたんです。そこの脚本家の方の名前っていうのは別のところを書いてあるんですよ。金子先生の名前がちゃんと書いてあって、しかも私と『料理万歳』やってるディレクターは、ドラマの方にすすすと、大概やってましたけどね。

東海林:カノックス。

さらだ:そう、それは久世さんがやっててカノックス。そこで、いっぱい向田邦子ドラマを作ってる。

金子:作りましたね。

さらだ:見るときに大体、金子成人さんに発注をしていた。

金子:正月はそうですね。夏はちょっと違いましたね。

さらだ:だからいつも、金子成人さんの方に上がってくるから、それに積んであるから。

金子:久世さんのとこで、あそこでコメディをよくやれたのが幸せだったな。

東海林:コメディって難しいですからね。

さらだ:でもやっぱ向田邦子の世界の中でコメディを書く？

金子:いや、正月のやつは、コメディと別の考えでやったんですけど。小林薫とか玉置浩二くんが『キツイ奴ら』とか、ああいう変なコメディを。

さらだ:いっぱいやってましたよね。でも、向田さんのシリーズってやっぱり久世さんの特別な思い出があって…。

金子:でも、もう原作なかったんです、あんまり。だから最初のやつは、思い出すんですけど、『はめ殺しの窓』って作品を使ったんですけど、それ以降は今年は何やろうかって夏ぐらいから…。

さらだ:だから、いわゆる向田邦子という看板を掲げて、あの世界を崩さないようにしてオリジナルを作ってたんですか。

金子:そうです。

さらだ:私も後から知って、そこまで全然詳しく知らなかったんだけど。ぜひ、ちょっと聞いてみようかなと。

金子:うん。だから僕の小さい頃の思い出とか、そういうのがヒントになってずいぶん作ってるんですよ。

さらだ:長崎の。

金子:うちの仏壇になぜか、知らない位牌があるんだよね。爺さんたちは知ってるだろうけど、わけわかんない位牌があったからね。そういう話を久世さんにしたら、面白いって。そこから話作ったりして…。

(01:00:09)

さらだ:それが田中裕子さんが出てきたり、小林薫さんが出てきたりっていう話になってくる。

金子:愛人の位牌じゃないかとか、そういう話になってくる。

さらだ:そうすると向田邦子の世界に近づいてきますからね。

東海林:金子さんがすごく久世さんの世界とか、人脈で何か縁がある。

さらだ:ご縁があるってそうですよね。これも縁だなという。でもそれがちゃんと1つひとつカラーになって残っていくっていう。でもこれ第16回向田邦子賞っていうといま30回ぐらいいったのかな。

金子:どのくらいいったのかな。

さらだ:やっぱり受賞したときって格別な思いがあるんですか。

金子:っていうかね、何回か候補になってたらしいんですよ。でも毎回…。

東海林:ことごとく落ちた。

さらだ:毎回4、5人なんかに。

金子:俺ダメだ、だいたい昔からそういう賞ってないんですよ。水泳のときは記録さえ破ればいいけど。

さらだ:コンクールではあれだったけど、『太陽にほえろ!』では採用されたけどみたいな。

東海林:でもこの受賞の言葉では、ちゃんと書いてありますよね。何度もノミネートされ、ついに来た。

金子:とうとう来たか。

東海林:僕はプロ野球のヤクルトファンなんですが、この受賞で3連敗のショックが晴れたと思いました。

＊

野球はヤクルトファン、スポーツも好き

さらだ:ちょうどそういうときだったんだ。東海林さんはヤクルトファンだから金子さんと同じで気が合うじゃないですか。

金子:僕はもう若い頃仲間たちと、神宮外苑で野球チームを作ってやってたんです。ヤクルトが弱いとき。

東海林:弱いときって関根さんの頃じゃないですか。

金子:そうです。

さらだ:関根さんの頃の弱いとき。

東海林:そうですよ。僕も結構、神宮通ってる。だから、

金子:池山、広沢が3番4番でブンブン丸とかってやってた頃だから、全然駄目だったんですけれど。それがもう、野村さんになってから優勝しちゃいました。

東海林:広岡の時にも…。

金子:広岡の時に1回優勝したんですけどね。

東海林:僕はその頃は知らないんですよ。

さらだ:でも脚本家の方って、文系だからもうずっとペンだけって方もいらっしゃるけど、金子先生も水泳も、野球もするし。最近は野球じゃなくて、ちっちゃい球の…。

金子:ゴルフですね。

さらだ:日本放送作家協会、あのゴルフ大会みたいな。

金子:でも下手になったんですね。ティーショットは飛ぶんですけど、その後がまずいです。緊張感がなくなって、どうも何かいいやって感じで打ってるから、うまくいかないです。

さらだ:東海林さんと一緒にされたんでしょ？ 日本放送作家協会のゴルフ大会。脚本家もゴルフするんだって。

金子:でも優勝したのは女性ですから。

東海林:フジモリユミです。あれハンデ関係なく優勝してますからね。

さらだ:プロと言われてますが、うちの業界では。

金子:だって男と同じとこで打って、全部オーバードライブしてくるんですよ。男を置いていくという球筋がまっすぐで性格なんだよ。やっぱり、ずいぶんやったんだろうな。

(01:05:12)

さらだ:金子さん、そういうところも脚本家としてはアクティブな…。

金子:運動部のせいだね。だからバドミントン僕好きなんです。親父がバドミントンのそういう協会を作っております。

さらだ:ぷシューっとやるんですか？ 私たちがやる羽根つきみたいな形でぷシューっと。

東海林:スポーツ用品店だったんですもんね。

さらだ:そっか、スポーツ振興の…。

金子:そうです。

さらだ:佐世保における。

金子:東京来て就職したのも卓球で。

さらだ:そうですね。

金子:全日本クラスの人たちが夜来て、ちょっと相手したりとか、うまくなってくるわけです。スーパースーパーとか言って。いや、最初はもう人がいないから、僕は相手にならなくて段々上手くなってます。最近はどうやってませんけどね。

東海林:意外な一面ですね。スポーツ系体育会系脚本家。

金子:だから、体力は自信あったんです。

さらだ:だって、その前スナックにお勤めしながら書いてたりとか。

東海林:運転したりしながら書いていたり。

さらだ:割と最近でも徹夜とかされたりは…。

金子:徹夜もう最近は絶対できません。

さらだ:しない？

金子:しないというか、できないですよ、

＊

成人先生の私生活は…

さらだ:やっぱ健康管理第一で？

金子:ていうかね、眠くなっちゃうんです。私事なんだけど、前の女房が死んだときに子どもがちょっとちっちゃかったんで、朝早く起きて弁当作らなきゃいけなかった。

さらだ:イクメンをやってたんですね。

金子:そう、6時ぐらいに起きて弁当作らなきゃいけないでしょ。それがね6年ぐらい続くと、もう癖になっちゃう。そうすると、12時ぐらいになると眠くなってくるっていう…。

東海林:イクメンもやってたっていう苦労を知らませんでした。

金子:僕は料理好きですから、作るのが苦じゃないんで。

さらだ:現在も作ってらっしゃる？

金子:暇があれば。

さらだ:いまは奥様？

金子:そうですね。僕の場合はスナックでやってたのもあるし、あとはボーイスカウトやってたのもあるし。

さらだ:飯盒炊爨とか？

金子:飯盒炊爨もちろん。それから田舎でスポーツ用品の商売やってるとき、おふくろたちが店にいとカレーは僕が作って…。

東海林:そういうのを、その脚本にしちゃったというのは作品ありますか？

金子:ないです。料理をすとか食堂の話なんかは、やったことありますけど。スポーツものもやりたいんだけど、役者がスポーツやってるかどうかって経験者が見るとすぐわかつちゃうんだよ。キャッチボール1つ見てもわかるでしょ。

さらだ:あとスポーツ振興したお父様の話も面白いし、イクメンの話も面白いし、なんか本当に今日だけじゃお話が足りない。先生は本当にありとあらゆる番組やってらっしゃいますよね。

金子:うん、好きですね。コメディーから文芸作品から好きなんですよ。

さらだ:なんか来るものは拒まず、みたいな。

金子:でも、たまに失敗するんですよ。もうこれ書かない、書けないなと思うのはあるんですけど、何か興味湧いちゃうんだよね。

さらだ:このジャンル専門の方もいらっしゃるけど、もうありとあらゆるのが来たらいわゆる職人的にもやれるという…。

金子:やりたいですね。

さらだ:そこがすごい。

東海林:最近は時代劇多いですよ。

さらだ:大河ドラマも書いてらっしゃるし、朝ドラも書いてらっしゃるし。江本孟紀さんのデビュー作も。

金子:『田中丸家御一同様』ね。

さらだ:あの頃、私は江本さんの深夜トーク番組やってたですよ。それで江本さん、いろいろマスコミ出てたので、テレビのドラマって大丈夫かなとか思ってたんです。

金子:もうセリフはできるだけ少なくすることで。

さらだ:そうか、それ金子先生だったんだ。

(01:10:01)

金子:あのときも野球のこといろいろ聞きました。あの人意外と野球は真面目だから。

さらだ:そうです。

金子:風呂入ったら、ボールを握って、手首をこうやるんじゃないくて、

東海林:お風呂の中でボールを握って手首を運動させる。

金子:するところ、強くなるんだとか。そういうことでホテルでやってるときに、騒がしいなと思って外を見たら、同僚選手が門限過ぎてから帰ってくるのを見て、「明日は負けるなと思った」って言ってて。

東海林:なるほど。

金子:あの人、ほんと真面目で。

さらだ:本当にいろいろな方とお付き合いがあつて面白いなと思ったけど、また来週も来ていただいて…。

東海林:僕は映画のお話も伺いたかったんですけども、これは来週っていうことになるんですかね。ということで、今週は金子さんのいろんな仕事のお話で。

さらだ:倉本聰さんのところのお話とか、八千草さんとのご縁とか向田邦子賞の話とか…。

金子:本当に居合わせたのがよかった。節目節目でそれは思うな。成瀬さんが脚本の勉強をなさいつて言ってくれなかったら、やってなかったかもしれない。本当は映画監督になりたかった。

さらだ:助監督の口があるからとかで違うことしてたら、違ったかもしれない。

東海林:ということでまた来週お話を伺わせていただきます。金子成人さん、どうもありがとうございました。

金子:どうもありがとうございました。

東海林:面白いっていうか興味深かったのは、小さい頃は役者になりたい、今度は映画監督になりたくなって、そして結局脚本家になったという…。

さらだ:そうですね。

東海林:自分の夢を追っかけていって、何をしたらいいのかなっていうふうにやっていると、そういうふうに変わっていくという。それで脚本家に…。

さらだ:修業時代の話がすごく面白かった。倉本聰さんのところに行って、ずっと清書していたとか、あと八千草薫さんのお家で運転手。それがご縁にもなって。神様って見てるんですよ。頑張ってるな、この子はみたい。だから向田邦子賞を取った作品が、八千草さんの主演のドラマになるという。こんなドラマチックなことってなかなかないと思います。

東海林:金子さんもおっしゃってたように、縁だね。

さらだ:そうですね。大切にしてお仕事をしていると、どっかで神様は1回ぐらい、私たちにもいいことがあるように。

東海林:そうですね、

さらだ:かもしれない。

東海林:神様お願い。

さらだ:そうです。

東海林:さあ、今夜もそろそろ閉店のお時間です。お相手はマスターの東海林桂と…。

さらだ:ママのさらだたまこでした。

東海林:それではまた来週、

さらだ: さようなら。この番組は日本放送作家協会の制作協力でお送りしました。
(01:17:27)